

大陸（満州）

精鋭野砲隊、戦わずして敗戦

秋田県 鷹嶋利平

私は大正十四（一九二五）年二月、日本海岸の秋田県由利郡西目村出戸の農村で四男として生まれました。

両親は健在でしたが、生活は四男二女の六人の子供を抱え、母は行商、父は北海道へ出稼ぎ等で、どうにか家計を支えておりました。

私が高等小学校を卒業するころは兄たちは独立したり奉公に出たりして、家では私一人でした。

当時の国策に従って昭和十四（一九三九）年三月、満蒙開拓青少年義勇隊に志願し、六月に満州

に渡りました。ここでは五年余り慣れない農作業等に従事しました。

戦争が激しくなると共に徴兵検査の適用年齢が繰り上げになり、十九歳になった私もこの対象者になり、徴兵検査受験のため、開拓団から約二十人ほどトラックに乗車して試験場に向かいました。

北安省嫩江県墨爾根^{メルゲン}根駅に到着。ここから汽車で黒河省の首都黒河市にある試験場に向うと聞かされましたが、地図上では鉄道は嫩江以北は途中で無くなっているのが不安でした。しかし黒河までは通じていて何の心配もなく無事黒河駅に到着しました。

途中の山神府には秋田の歩兵第十七連隊の主力部隊が駐屯していると聞き、なるほど兵舎らしい

建物が遠方にかすかに見えました。また駅には多くの貨物の集積場があつて、軍の駐屯地らしく感じられました。

開拓団の同僚で大正十三年生まれの二十歳の者は、一カ月前に我々と同じ行程で来て、ここで徴兵検査を終わっていました。我々大正十四年生まれの十九歳の者は、練り上げて徴兵検査となり、二日にわたって検査を受け、私は甲種合格でした。午後から自由行動が許され、私は数人の同僚と共に対岸のソ連領（アムール河）で水泳を楽しみました。

帰りは往路と逆コースで小興安嶺を越え嫩江県の我々の開拓団に帰りました。そして入隊までの間は農作業や入隊後の体力作りを考えて、今まで以上に作業に精出しました。

十月に入ると毎日のように同僚に入隊通知が入り始め、私は今まで冬期には零下四〇度に達するこの地での生活でしたので、これからの軍隊生活は南満地域を願っておりましたが、その願いはか

なわず、当地と変わらぬ「ハイラル」の野砲兵第一一八部隊に入隊の通知がきました。

十月二十八日、開拓団の皆様から見送られ、嫩江省墨爾根駅へと急ぎました。

駅に着いてチチハル方面行きの汽車を待っていますと、我々の開拓団から六十キロほど北の圈泡義勇隊開拓団の小林榮次郎君とバツタリ出会ったのです。彼は秋田県由利郡岩城二子の出身で、毎年、嫩江で十月開催される開拓祭りで懇親を深めている仲です。しかも私と同じ部隊に入隊と聞いて力強くなり、一緒に汽車に乗りました。

途中チチハルで奉天（瀋陽）、ハルビン方面からの入隊者と合流し、夜の大興安嶺へと向かいました。これで私は大小興安嶺を越したことになります。

翌日午前、ハイラル駅到着。下車して感じたことは住民の服装、建築物、風景はチチハル地区とは違う蒙古地帯を思わせるものでした。

出迎える下士官に引率されて、兵舎に入り、一

休みした後には所属する中隊が発表になりました。そして各中隊ごとに引率され、さらに各内務班に分散、私は小林君と同じ教育班に編入され、心強く思いました。

所属中隊 野砲兵第一一八部隊第八中隊

班長伊藤伍長(後に軍曹)、助手福内上等兵(後に兵長)、星屋上等兵(後に下士官志願して軍曹)で班長以下三人は共に名古屋出身でした。

第一一八部隊は、名古屋師団・熊本師団、それに我々のような在満入隊者の混成部隊でした。愛知県・岐阜県・静岡県・鹿児島県・熊本県・長崎県、それに全国各地出身の在満入隊者という賑やかな部隊でした。

困ったことは言葉でした。それぞれの土地の方言で話し合うので、先輩は慣れていますが我々初年兵には聞き取れないことがあり、聞き直すと怒られます。

ハイラルの街は四方が小高い丘で囲まれ、街の中心部に伊敏川が流れています。周囲の丘は陣地

で、コンクリート造りの倉庫には、数カ月分の非常用食料等が備蓄されると聞きました。

我々部隊の駐屯していた東山地区には軍司令部もあり、砲兵、歩兵その他各科部隊も駐屯していて、軍都といっても過言でないと思われました。

十一月に入ってから入隊式が行われ、翌日から六カ月間の初年兵教育に入りました。

初年兵の教育期間は、いずれの部隊も大同小異と思いますが、伝統的と聞いていた私的制裁は関東軍司令部からの禁止通達があつて、我々の部隊ではほとんど私的制裁がなく、笑顔の絶えない内務班生活でした。

ただ日増しに襲ってくる寒さには慣れていたとはいえ零下四〇度の気温には全く閉口、特に内地からの初年兵は相当まいっている様子でした。

最初の三カ月は徒手教育でしたが、我々砲兵隊には小銃は五人に一丁ぐらいしか渡っていないので歩兵隊のような苦労はなかったのです。

徒手訓練が終わり、いよいよ分特業の訓練に入

りました。砲手、通信、自動車、観測、無線に分かれ、人員によって大隊教育、中隊教育、部隊教育に分かれて教育されました。

私は中隊から五人観測班にまわり、第七中隊、第八中隊、第九中隊の三個中隊の合同教育で、教官は第七中隊長の江幡少尉、助手は第八中隊の福内上等兵でした。

最初は室内での学科教育、次に器材の名称等で、小学校卒業程度の私には難しくて大変でした。特に数学のサイン、コサイン等三角法や横文字の読み書きには、中隊へ帰ってから、助手から繰り返し繰り返し教えてもらうなど随分苦労しました。このように苦労した学科教育も、どうにか合格点をもらい実技教育に移りました。

実技教育は砲兵隊の機器の現物を前にしての教育で、測遠器、砲隊鏡、磁針方向盤等を三脚に取り付ける初歩から始まりました。我々観測班の教育は晴天の日は屋外、吹雪等で悪天候の日は屋内で行われましたので、砲手教育の連中からは羨ま

しがられました。冬期の好天気でも屋外は零下二〇度もあり、教育が終わって器具を屋内に持ち込むと真っ白に氷付きます。自然に溶けるのを待つてから手入れを行い倉庫に収納します。

倉庫の責任者は私で、鍵は中隊本部の保管ですが、私以外の者は鍵の持ち出しは禁じられていました。

四月下旬いよいよ第一期の検閲、班長以下緊張して迎え、この検閲も無事終了して一等兵に進級が発表されました。

この発表は序列順で行われ、特別のことがない限り、次の進級である上等兵、兵長への進級する場合にも、この序列が変わらないのです。先輩からよく一期の検閲前に人一倍頑張るよう言われていました。

結果は六十人中二十八人の進級が発表され、私はまさかの一番で嬉し涙が止まりませんでした。早速、進級者全員を指揮して中隊長、准尉、事務室、下士官室、そして古年兵に進級の申告に駆け

回りました。

五月に入り事務室に呼ばれ「鷹嶋一等兵、中隊長官舎当番を命ず」との命令を受けました。思いもよらぬ命令で戸惑ったのですが何ともしようがありません。上等兵教育を受け始めたばかりなので、班長も意見を述べたらしいのですが、中隊長命令では従うよりしょうがないと班長から言われました。

早速、身の回りを整理、翌日「公用腕章」を付けて部隊を後に陣地の麓にある官舎に入った途端、故郷に帰った気分になりました。

今日から陸軍一等兵の営外居住が始まったのですが、果たして家政婦のような仕事ができるだろうか、心細くなりました。しかし、他の者でもできることと我を戒め心を新たにしました。

夕食は隊長懇意の食堂でご馳走になり、翌日は朝早く起床して食事の準備、隊長を見送ってから掃除、洗濯となんとか出来ました。問題は毎日の食事の準備、開拓団当時、調理の手伝いをしたこ

とはありますが、詳しい調理方法は分からない。こんなことになるならば、少し勉強しておけばと悔いられました。

隊長は鹿児島県出身で四十歳代、部隊では最高年齢で単身赴任され、面倒見がよく料理も上手で、私は助かりました。

今までの六カ月間の教育、演習、兵器の手入れ、兵舎内外の清掃、洗濯等暇のない毎日でしたが、今では一応の作業が終わると暇潰しに苦勞するほどで、前の当番が残してくれた雑誌も読み尽くし官舎ボケになりやしないかと心配でした。

心に余裕が出来て、暇をみては中隊の同年兵に面会に行き、話を聞くこともありました。相変わらず忙しい毎日のようで、演習、不寝番、衛兵と新しい勤務も増え、大変だとのことでした。私は軍人として取り残されるような気がしました。

五月中旬過ぎ、隊長から「部隊が大興安嶺山脈に入り、予想されるソ連の進撃に備えて陣地構築を実施することになった。明日にでも動員命令あ

るかもしれないので、心の準備と荷物をまとめて置くように」とのことでした。早速、隊長の日用品等を行李に詰め、準備した途端に伝令が来て「動員下令、明日夜半出発する旨部隊長から伝言するようありました」とのこと、隊長に伝えました。翌朝、行李班の兵二人が行李運搬に来て私も隊長と共に中隊に戻りました。

翌五月二十五日夜半（ソ連軍に気付かれないため）事務室勤務者を留守部隊として、全員がハイラル駅に集合、準備していた軍用列車に乗車、興安北省伊列克得駅イリククトに下車しました。

駅より五キロほど行軍して、作業小屋風の建物に宿泊しました。収容しきれない兵は天幕を張り、約一カ月ぐらいここに滞在して、構築予定地までの道路工事に従事しました。

大興安嶺山脈は標高一、二〇〇〜一、三〇〇メートル程の連山に、点々と一、六〇〇メートルほどの高山が突き出している山岳地帯です。

この連山の西面の中腹に横二〜三メートル、縦

七〜八メートルの塹壕を掘り、火砲を入れ、西方から進撃する戦車を迎え撃つ戦法を取るとのことでした。

「いろは坂」に似た道路が完成、また草葺き屋根の宿舎も建て終わり、全員ここに移動しました。

我々の隊の大砲は口径7・5センチで、対戦車・対空では、当時の日本軍の火砲の中では一番威力がありました。一個中隊に三門あり、一門に一個分隊十五人から十六人が配属され、他に通信、観測、自動車（牽引車）要員が配属されています。

翌日から早速、穴掘り作業に従事しました。山は岩石で、現在のような鑿岩機さくがんきがある訳でなし、専らハンマーとタガネで穴を掘り、その穴にダイナマイトと導火線（一秒間十センチ燃えるので逃げ隠れる場所により長さを決める）を詰め、泥で穴を密閉し、導火線に点火し、前もって決めていた退避所に避難します。普通十五秒ほどで爆破する。爆破で砕けた岩石の運搬処理の繰り返し作業と糧秣の補給が少ないため、空腹続きでの重労働

には皆まいました。

私はこのような作業は初めてで、しかもダイナマイトは危険物と聞いてはいたが実物を見るのも初めてで、恐る恐る穴に詰めていて同僚からは意気地なしと呼ばれました。

ある日、付近の鉄道沿線やトンネルの状況視察の行軍が実施されました。

途中に林や日本軍の兵舎があり、それまで車で山越す際には気が付かなかったのですが、トンネルの構造が変わっているのです、トンネルの中央が出入口より高くなって、中央に煉瓦造りの煙突が立っており、汽車が通る度にモクモクと煙が出てくるのには感心しました。

この作業は我々第八中隊のみで七月に入って本格的に行ったのですが、ほかの中隊は何しているだろう、我々が疲れて悲鳴を上げているのに応援にきてもよいのにとつぶやく者ができました。

八月八日だったと思いますが、ソ連軍が予想どおり不可侵条約を破り、満州里からハイラルに侵

入してきたとの緊急連絡があると同時に、留守部隊の田中准尉以下全員が我々の駐留地に移動してきて、直ぐに作業中止となり本部に集結しました。戦闘準備命令が出て、各自身の回り品のとりまとめと兵器の点検整備でてんてこまいでした。

我々は銃剣を持つてはいるが、最近入隊した補充兵の剣は竹製、銃は木製の銃剣術練習用の銃で、剣は陣地構築に使用したタガネやノミ等を打ち直して剣の代用品を作り、木製の銃の先に縛り付けて白兵戦用に備える。また下士官はサーベルと拳銃を持参するという全く頼りない戦闘準備でした。

午後、伊藤軍曹、福内兵長、私鷹嶋一等兵の三人が斥候を命ぜられました。私は三八式銃に実弾を装填し、着剣して出発準備完了、西方から進撃して来るソ連軍に対しての布陣を目的に観察するよう隊長から命ぜられ出発しました。

十キロほど道路の状態や森林の位置等細かく地図上に記入して戻って隊長に報告しました。

私は明日にでも進撃して来るソ連軍との交戦に

は、序列一番で進撃した責任上、恥じない行動を取って深く散る覚悟をしました。

幸か不幸か、その夜、軍命令があり、我が中隊は、牡丹江方面からハルピンに進撃して来るソ連軍と市街戦を行うべしとのことで、第七中隊を残し第八、第九中隊は直ちに南下することになり、八月十一日早朝から移動準備が始まり、第八中隊全員は火砲三門を主力として興安省興安駅に集結しました。

この貨車の手配に時間がかかり、無蓋車に火砲を積み偽装網を被せて、その下に我々が座り、出発したのは八月十二日で、小雨の降っている早朝に大興安嶺を後にしました。

札蘭屯、成吉思汗、昂々溪付近までは順調に走った汽車が急にノロノロ運転になりました。通過すべき中間各駅に停車するようになり、ハルピンには三十時間前後で着く予定が七十時間もかかり、八月十五日午前に着きました。

この理由は後ほど分かったことですが、日本の

敗戦とソ連軍の進撃の恐れを感じた地元住民や邦人の退避者の乗車した汽車を、満人の駅長がワイ口をもらい先に通したためとのことでした。

ハルピン駅構内に入ると、構外から国防婦人会や愛国婦人会の方たちが「日の丸」の旗をちぎれるばかりに握って「兵隊さん、頑張って」と大声で歓迎してくれました。

貨車から火砲を降ろし、昼食後に一休みしたころから、駅員や住民の我々に対する態度が変わりました。「変だなア」と思っていた矢先、「全員広場に集合、整列せよ」と隊長の今まで聞いたことないほどの大声が聞こえました。

何ごとがあっただらうと全員整列しますと、先ほどの大声の隊長とは思えない低い声で「甚だ残念なことを諸君に伝えなければならぬ。ただ今、関東軍司令部から大日本帝国は無条件降伏したので武装解除してソ連軍に兵器を引き渡せよとの命令を受けた。今まで至らぬ本官を助けて頂きありがとうございます、今後のことについては班長を通じて伝え

る」と涙ながら話して去って行きました。

我々は呆然、自失、そのまま座り込み、しばらくして涙ぐみながらの声が聞こえる。

「鉄砲はおろか、大砲一発も撃たないで戦争に負けたとは、とても信じられない。残念無念、夢ではないだろうな」と自分の頬を殴り、「痛い、やはり夢でない」と皆を笑わせる。

皆に笑顔が出たところで、班長から「これからこの空き兵舎を借りたので、大砲はこのままにして、個人に貸与されている兵器類を持って兵舎まで行くが、途中どんなことがあっても無視して、行動するように」との注意があり四列縦隊で兵舎に向かいました。

着いた兵舎は今までのものとは違い立派な建物で、久しぶりで兵舎での宿泊ができました。

翌日、練兵場に兵器類を持って集合、ソ連軍に兵器を渡して完全に武装解除し、我々は帯革一本という身軽な身になりました。

その後、近くの部隊の糧秣倉庫、被服倉庫が解

放され、米、缶詰等の食料や被服などは今までの物を脱ぎ捨て新品に着替え兵舎に帰りました。

朝鮮籍兵士は召集解除になり、今後の幸せを祈りあいつつ握手して別れました。

しばらくゴロ寝の兵舎生活で、皆元気になり復員の日を待っていたところ、日本へ帰るために移動するとのソ連軍の指示があり、ハルピンから南へ五十キロぐらいの玉泉街へ移動しました。

満州では河、川、泉などが地名に付いた所は飲料水等、水には不自由ないそうで、なるほど玉泉街も綺麗な水の流れる町でした。民家を接収して宿泊し、収容しきれない者は天幕生活でした。食事は前に倉庫から持ち出した米で飯盒炊さん、終戦後の楽しいひとときでした。

八月二十五日、また移動命令で、今度は海林貨物廠まで徒歩移動でした。

ソ連軍の話によれば「満州内には一般の日本人、開拓移民者等が多く、お前たち軍人はいつ、日本へ帰せるか不明であるが、おそらく牡丹江・綏芬

河を經由してウラジオストックから船で日本へ帰すことになるだろう」との言葉を信じて、ハルピン出發以来、早朝から夕刻まで「ダワイ、ダワイ」の言葉に追われる行軍でした。途中、横道河子街の山越えの際には遠方の山岳地から夜になると砲声が聞こえてくる。道路の至る所に擱座かくざした両軍の戦車があり、比較すると日本の戦車の貧弱さ、また戦死者の持っている銃はソ連軍は自動連発銃、日本軍は手動装填単発銃で、日本軍の兵器の貧弱さをまざまざ見せ付けられました。

六日間歩き続け、やっと海林に到着しました。

海林には一万人ほどの日本軍が集結しており、我々は壁の無い貨物倉庫に入れられました。ここでは中隊ごとのザコ寝で、食事の準備にも薪が無い、付近の燃える物は先着の者が集め貯えており、我々は遠方まで行って探しました。しかし、それも枕木だけ、重い枕木を数人で運んで来ても細かくする道具が無い。なんとか苦勞して薪にして炊飯する毎日でした。

九月に入ると霜が降りる、内地帰還の情報も入らない。食料もだんだん無くなってくる、心細い毎日を二カ月余り送りました。十一月初めに日本へ帰すから牡丹江駅へ移動するようとの命令があり、翌早朝またも行軍で牡丹江駅に到着と同時に貨車に詰め込まれ、シベリヤ鉄道の乗客（いや貨物）となりました。

以下省略

前に戻りますが、私たちが大興安嶺を離れる時、残留部隊である第一八部隊の第三大隊、第七中隊の兵士はソ連軍との交戦で全滅したとの情報を後で耳にしました。残留せず我々と行動を共にすれば、現在、元気でいられるのにと悔しくなりません。

ご冥福をお祈り致します。

復員後、私は満州在住期間が長いので、就職には苦勞しました。臨時社員待遇で印刷会社、文房具店等、点々と職変えしているうち、軍隊で苦勞したことを考えれば何でもできる、一つ営業を始

めようと、前に勤めた文房具店、印刷会社の方々から教わった事を参考にして、子供たちの使う技術的教材、家庭科の教材、理科関係の器材、それに薬剤（取り扱い免許取得しました）等の店舗を開き、七十二歳まで頑張りました。しかし、大型店舗の進出には勝てず、また高齢のため思うように活動できなくなり閉店し、現在妻と二人で健康第一に余生を楽しく暮らしております。倅は会社勤務で孫三人と共に近くに別居しております。

ともあれ「平和の礎」に多くの方々が申し述べております通り、戦争は二度と起こしても参加しなくてもなりません。

私は満州におりましたので戦後の引揚者の悲惨さはこの目で見、また聞いております。今だに残留孤児について問題も解決していません。新聞紙上、テレビで見聞するたび胸が痛みます。

最後になりましたが、この度の戦争で犠牲になられました戦友諸兄の御霊に哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り致します。

満州の重砲兵

長野県 有賀 国雄

大正八（一九一九）年十一月、長野県上伊那郡西箕輪で生まれる。家族は、父義久、母くに子、それに姉二人、弟二人の五人兄弟の長男でした。家は養蚕を中心とした農家で、一町歩近い桑畑と三反歩ほどの稲作をしていました。

西箕輪尋常高等小学校を卒業して東京市江戸川区平井四丁目にあった畠山鉄工所に勤務しました。ここは当時軍の下請け工場として船のクランクを主体に製造していました。

この鉄工所には四年間勤務しましたが、勤務中の昭和十四（一九三九）年、伊那市図書館で行われた徴兵検査を受け、第二乙種でした。地元から検査を受けたのは六十人でした。それで昭和十五年一月十日、野戦重砲第七連隊要員として東京市世田谷の野戦重砲第八連隊に入隊しました。